

獺岳くんの鬼退治

めりお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者「鬼滅の刃に転生したらクズの鎧鴉だった」
果たして生き残れるか

目次

山蛭	7
飯食わぬ嫁	4
鋙鴉	1

鏝鴉

鴉が嫌いだ。

鳴き声が耳障りだ。

阿呆、阿呆と囁かれているようで腹が立つ。

獺岳は常々、この気に入らない畜生を斬り捨ててやりたいと思っ
ている。

▼
鏝鴉。

鬼殺隊員に付いて任務を伝える。

人語を解する。

九官鳥のように人間の声真似をするのではない。自分の意思を持
ち、流暢に話し、受け答えをする。

尋常な調教や訓練ではこうはなるまい。

阿呆、阿呆と夕暮れに鳴いている鴉がふと、嘎れた声で、何処其処
ノ町デ人ガ死ンダと噂話をする。背筋がゾツとする不吉な光景だ。

▼
雷の呼吸を習い、選別を突破し、鬼殺の剣士になった獺岳は、鏝鴉
を付けられ、己の鋼を選んだ。

選別から十日経ち、修行をしていた山に戻って身体を休めていた獺
岳の元へ、選んだ鋼が刀となって届いた。

鬼を殺すことができる唯一の武器。

一年中陽の差す陽光山から採れる猩々緋砂鉄と猩々緋鉞石から打
たれた日輪刀。

持ち主の呼吸の適性に応じて刃の色が変わる色変わりの刀である。

獺岳が触れると雷の呼吸を示す黄色に変わった。

獺岳に雷の呼吸の修行をつけた師範の桑島慈悟郎はただ領いた。

獺岳は当然だと思った。

少し何かが降り積もり、それより多くがこぼれ落ちる。

背中に滅の文字が入った鬼殺の隊服は弱い鬼の爪や牙を通さない。
首には魔除けの勾玉を巻いてある。

泣き虫で弱虫で愚図の弟子とは顔を合わせないまま準備を整えた獺岳は発った。

歩き出すと肩に鴉が降りてきた。

鏝鴉。鬼殺隊の任務の伝令役。

どんな任務を言い渡されるのだろうか。

そう思っていると、いきなり嘴で頭をつつかれた。

鴉は第一声に獺岳をクズと罵った。

獺岳はカツとなり、日輪刀に手を掛けた。

鴉は次に獺岳の過去をその目で見てきたかのように言い当てた。

雷の呼吸の修行時代、気に入らない弟子に桃を投げつけたこと。

さらにその前の寺の世話になっていた頃、盲目の痩せた男の言い聞かせを無視して孤児が身を寄せ合う寺に鬼を呼び込み、自分一人が逃げ延びたこと。

獺岳は血の気が引いた。

自分以外誰も知らないはずのことだ。

この妖しい鴉は人語を解するのみならず、人の過去をも見通すというのか。

斬り捨てるつもりで柄にかけた手にはじつとりとした汗が滲んでいる。

鴉は嗚れた声で鳴く。

未来を知っていると言う。

「未来だと。言ってみろ。適当なことを抜かしやがったら殺してやる」

「クズハ負ケル！ クズハ死ヌー！」

「ふざけやがって、殺す!!」

振り上げた刀は宙を切った。

▼ 鴉は刃の届かない空を悠々と舞う。

「穴ヲ塞ゲ！」

「箱ヲ満タセ！」

「独リデ惨メニ!! 死ニタクナケレバ!!」

▼ 鴉の不吉な予言を聞いて獺岳は思った。

嫌だ。

嫌だ。

独りで惨めに死ぬのは、嫌だ。

何故かわからないが、鴉の言うことは真実だという直感があった。過去を言い当てられた不気味さも、罵られた苛立ちもどこかへ行つてしまうほどの恐ろしい現実味。

このままでは自分はその暗鬱な未来へ向かってひた走ることになるだろうという不思議な予感。

「ど……どうすればいい？ 俺はどうすればいいんだ」

獺岳は形振り構わず鴉に縋った。

死にたくない。

負けたまま死にたくない。

まだ勝っていないんだ。

ずっと負けてきた。

それでも生きてさえいればいつかは勝ちの目があると信じてきた。何でもするから勝たせてくれ。

▼ 道に這い蹲つて懇願する獺岳を、鴉が阿呆と嗤った。

これは、獺岳が本来辿るはずだった道筋を外れる話である。

飯食わぬ嫁

里四郎は農家の四男だった。

家の順序は決まっていた。いいものをたくさん食べていいのは、まず父母、次に上の兄弟からと決まっている。一番下の里四郎の食事は、兄がご馳走様と置きっ放しにしたご飯粒が一つ二つ貼りついた茶碗を水で満たして溶いたもの。それを飲んで洗うのが里四郎の仕事だ。里四郎は日に弱く外で長く働けなかった。代わりに藁や竹で細工を作って売った。いろいろ工夫をしてそれなりの金にはなったが、額に汗して働いているわけではないからと褒められることはなかった。辛かった。

穀潰しの役立たずでも腹は減るのか。

里四郎が痛くなるほど空いた腹を撫でさすのを見て家族はそう笑った。一人弱者を定めて見下す相手を作ることで、集団はある種の団結を深める。

いつしか里四郎はこう考えるようになった。

穀潰しは悪だ。

▼
里四郎はやがて家を出た。

都会で商売に成功し、金持ちになって、美しい女を妻にして連れ帰って故郷に錦を飾った。

家には老いた父母と兄たちがいた。腰が曲がって寝たきりになり、思うように働くことができず、日々やつとの暮らしをしていた。

里四郎とその妻は働き手として稼ぎ手として歓迎されて家に入った。

▼
わざわざ鄙びた田舎に帰って家族の面倒を見るとは、できた末っ子だ、と近所からは評判になった。

▼
里四郎の妻は、いつも黙って優しい笑みを顔に貼りつけている物腰穏やかな女だ。女の長く黒々とした髪に櫛を通してやるのが里四郎は好きだった。そのときだけは無口な女も里四郎に話をしてくれる。

里四郎は結婚相手に条件をつけていた。
飯を食わない女。

条件を聞いた相手は里四郎は結婚する気がないものだと思った。
それか現実そんな女はいないと窘めたが、里四郎は聞く耳を持たな
かった。

穀潰しを増やすくらいなら結婚などしなくてかまわない。

そう思っている。

けれどこうして里四郎は妻を娶っている。

そして里四郎の妻は飯を食わない。

米の一粒も減ることはない。

だから里四郎は妻を好きになった。

▼ 「喰ったのは五人か」

夜中に家を訪ねてきたのは詰襟の黒い隊服を着た少年だった。

鬼殺隊の剣士、獺岳だと名乗る。

里四郎は獺岳を追い払おうとした。しかし獺岳は引き下がらない。
そのやりとりを聞きつけて妻がやってくる。

今は来るな。

里四郎が止めるのも間に合わず獺岳は妻を見つけた。

「ああ、そっちな」

獺岳は刀を抜いて妻に斬りかかった。

妻は獺岳に背中を向けて逃げ出す。

走って靡いた後ろ髪が束を作り、ぐんぐん伸びて、蛇になって獺岳
に襲いかかる。

獺岳は髪の毛をあっさりと斬り落として距離を縮めた。

髪に隠れて見えなかった、妻の頭の後ろにある本当の口が裂けるよ
うに叫ぶ。

助けて！

▼ 二口女の首が落ちた。

里四郎はへたりこんで、おいおい泣き始めた。

穀潰しは悪だ。

それなら五穀を食わない鬼は人間より善じゃあないか。
俺にとつてはもつたいないほどいい嫁だったのに。

「憎い相手を鬼の餌にして復讐しただけじゃねえか」

獺岳はそう言い捨てて立ち去った。

家には里四郎以外もう誰もいない。

山蛭

夜になると鬼が出る。

都会では洋燈に代わって電灯が夜を明るくし、数は少ないものの自動車走らるようになった今では些か信じ難い迷信の類である。

西洋の後追いや輸入をしていた明治の初めの頃から進んで、四十年を過ぎてからは国内での科学の発達に拍車がかかった。

この科学の時代に鬼が出ると信じているのは田舎の古老くらいだ。夜に人を襲う者がいるとして、鬼ではない。強盗や獣の仕業だ。教育を受けた者ほどそう思う。

だが鬼はいる。

千年の昔より夜の闇に潜んで人を喰う悪鬼は実在する。尋常ではない再生力、怪力、血鬼術という怪しい術で、人間の生き血を啜り肉を食む。まともな方法では殺せない。

そして鬼を狩る者がいる。

鬼に対する唯一の武器、日輪刀を携えて、厳しい鍛錬と呼吸の技術によって鬼のように強い力を振るう人間の集まり、それが鬼殺隊だ。

獺岳は雷の呼吸を修め、隊員希望者を振るい落とす選別に合格した鬼殺隊の剣士だ。

鬼殺隊より任務を受けて日輪刀で鬼を殺す。

なお、伝令役につけられた鏝鴉とはどうも馬が合わない。

あいつの性格が悪いのが悪いと獺岳は思っている。

▼
尾野蛭ヶ岳おのびるがたけは山菜や茸など山の恵みが多いことで地元民には有名だ。

山中には岩魚や山女魚が棲むほど清い川も流れていて、溪流釣りを目的に遠くからやってくる者もいる。その川に行くまでの最短の方法はひるあめと呼ばれる森を突っ切ることだ。頭上には葉をつけた木々の枝があり日を遮る。地面には落ち葉が積もり、さらにその下は腐葉土になっている。

その森がひるあめと呼ばれるのは文字通り蛭の雨が降るからだ。

木々による日陰と水場が近いことでじめじめ湿気た環境では山蛭

が繁殖する。

山蛭は動物が近づくと吐息に含まれる二酸化炭素や熱を感知する。獲物を見つけると木の幹を這い上り、枝葉の先から落ちて襟元の隙間に侵入し、首や背中にいつのまにかくっついていく。この樹上から落ちてくる蛭の量がやたらと多い。雨が降るのに紛れて落ちてくると、強い雨に打たれているのか蛭に打たれているのかわからない。落ち葉の下から靴を登り、足や脹脛、太腿まで入り込んで血を吸って膨らむ。吸血する際には痛みを感じさせない麻酔を注入するので気づけない。無理に剥がすと皮膚が千切れる。傷口からはなかなか血が止まらない。

厄介な相手だが、火で炙ればころりと落ちる。頭巾を被り手袋をして、足首や手首、首元を徹底的に布で巻いて皮膚の露出を作らないようにすること、山蛭に取り付かれていないか確認を怠らないことである程度防ぐことはできる。

そんな手間暇をかけて川を目当てに森を通るくらいなら迂回した方がマシだというのが地元民の共通の考えだが、時折忠告を聞かない余所者に被害が出る。山を降りた後、靴を脱ぐと血を吸って丸々と太った蛭を見つけて悲鳴を上げる。

被害といってもその程度のものだ。ある意味山を舐めてはいけないという勉強になるだろう。だけど、決して夜のひるあめの森に入っ

てはいけない、と麓で入山者の管理をしている米山よねやままりは語る。

まりは初老の女で、慶応生まれだが物心ついて殆どの人生を明治と過ごした。女だが一人っ子なのもあってか親が教育熱心だったので、物事への興味関心が育った。よく本を読み、新聞にも目を通した。世の中の不思議が解明されていく時代の中で、子供の頃は信じていた近所のお爺さんやお婆さんの話は、子供に夜を出歩かせないための方便だろうと思うようになったという。

「で、その話ってのは？」

尾野蛭ヶ岳で行方不明者が出ている、鬼の仕業かもしれないので調査せよとの任務を受けた獺岳が促す。

「夜には大蛭が出るというんです。頭を丸呑みできるほど大きくぽっ

かり口が開いた、人の背丈ほどある大きな蛭が。見つかったら全身に噛みつかれて血を吸われて死んでしまう。だから夜のひるあめには入ってはいけないと」

「犠牲者はいたのか？ それともただの言い伝えか？」

「実際、夜の中に森に入り込んで見つからなくなつた人はいました。見たという人もいました。でも全員というわけじゃなかったし、それは暗さと地面の湿気に足を滑らせてどこかに落ちたまま亡くなったとか、霧で何かを見間違えたとか、そういうことだろうと」

そこでまりは絞り出すように言った。後悔の滲む声だった。

「だから、大きな人喰い蛭なんておどかすための作り話、そう思っていた。でも違つたんです」

▼ まりが結婚したのは二十歳の頃で、当時としては遅かったが、夫はそれを詰らない優しい人だった。

子供を身ごもつたまりは悪阻が酷く、いつもなら食べられるものも食べられなかった。そんな中でなぜか魚だけは食べることができた。

海は遠いので魚屋の魚は高い。それに新鮮ではない。幸い近くで川魚が釣れる。夫はまりのために釣りに行つてくれた。

「ご馳走でした。感謝していました」

ある夜にまりは産気づいた。産婆を呼んで出産の準備のため男が追い出されるまでに、手を握つてくれていた夫は自分に何かできることはないか聞いた。

まりは朦朧とした意識の中で魚が食べたいと言つた。無理なものもそんな場合でないのもわかつていたが理性がきかなかつた。ただのわがままだから気にしないでよかつた。

無視してよかつたのに、夫はわかつたと返事をして夜の森に入つた。

朝になり子供は生まれたが夫は帰つてこなかつた。

大の大人なら帰つてこられるはずの距離だ。

森や川を搜索したが見つからない。

何日経つても行方がしれない。

森の中で釣り具や服が散乱しているのが発見され、大蛭が出たと噂になった。

それからまりは尾野蛭ヶ岳の麓に住み込んで、入山者の管理のついでにひるあめの森の警告をしている。

聞いてくれる者もいるが、わざわざ遠くから噂を聞いて肝試しに入り込んで帰ってこない者もいるという。

▼

夜の森は真つ暗で、夜露を吸った濃い緑の匂いがする。

山蛭を避けるため、塩や酢、その他地元に伝わる野草の汁を混ぜた液を染み込ませたり被った。それでも気がつけば隊服の肩や靴に山蛭が登っている。振り落としてもキリがない。

鴉はいない。ついてこなかった。蛭が嫌だと言う。

俺だって嫌だ。

がさがさと落ち葉を踏みながら森に分け入り鬼の気配を探った。

立ち止まって呼吸を整える。

蛭が寄るのは諦める。

時が来るのを待った。

樹上と地面の両方から同時に気配がした。

上から傘のように広がった大蛭が獺岳を包もうとする。下から絨毯のように広がった大蛭が獺岳を包もうとする。

木の上から虎視眈眈と機会を狙っていたのも、地中を掘って真下に來ていたのも、察しはいたが気づいていないふりをしていた。山蛭がどンドン群がってきていて嫌になったが耐えた。わかつていればどうということはない。足場が消え、上下に挟まれる寸前に獺岳は横に飛ぶ。お互いにくつつきあって一塊になった大蛭を上段から両断した。

「ぎゃっ」

悲鳴があがった。

月明かりが差し込み相手の姿がはつきり見えた。

人の背丈より大きな蛭がいた。てらてらと光る茶色の背にいくつかの黒い筋が走っている。山なりの背は猪に似ていた。先程斬られ

た傷は再生している。長年蛭に擬態して、年々人を喰って身体を膨らませていったのだろう。

仮に蛭が異常に巨大成長したもので、鬼でないとしても、殺すのが楽になるだけだ。

獺岳は溜息を吐いた。

「頸がどっちかわかんねえな」

真つ二つではさっきのように引っ付いてしまい駄目そうだ。

どうするか。

普通に考えて、口がある方が頭だろう。

つまり悲鳴をあげる方が頭だ。

「とりあえず刺すか」

日輪刀で頸らしきところを落とすと塵になったので、鬼だった。

▼

ひるあめの森を抜けて麓に降りた獺岳は、まりに大蛭の正体は鬼だったこと、鬼は退治したことを告げる。

「そうですか。……鬼が」

この先どうするか尋ねると、まりの死に別れた夫との息子が、一人の母を心配して町で一緒に暮らそうと誘っているそうだ。

今までは森に入る人を止めるため山の近くにいたが、これでその役目もなくなった。

山を出るのか聞くとまりは首を横に振った。

「頭の働かうちはここにいたいです。ここからは森がよく見えるから」

▼

まりと別れて近くの藤屋敷へ向かう。

道中嫌な予感がして隊服を脱ぐと案の定数匹の山蛭が腕や腹に吸い付いていた。背中にも付いているかと鴉に聞けば間拔ケと嗤われながらつついて教えられる。地味に痛い。

炙ったり蛭避けの汁をかけたたりしてなんとか剥がしたが血がだらだらと止まらず嫌な思いをした。

「鬼卜戦ツタ傷ヨリ酷イナア！ 藤屋敷デ医者ヲ呼ンデ治療シテモラ

ウンダロウ。蛭ニ喰ワレタツテナア！」

「てめえにもくつつけてやろうか」

飛んで逃げようとする鴉の首根っこを獺岳は掴んだ。

焦げて地面に転がる獺岳の血を吸った蛭からは、人を炙った匂いがした。

獺岳はふと思った。

大蛭の鬼の食い残しはどうなっていたのだろう。

決まっている。森の山蛭たちがありついていたのだ。

おこぼれに預かって跡形もなく片付けてくれる山蛭たちと、鬼はあらゆる種の共生関係にあった。

殺して喰っていたのは鬼にせよ、こいつらはその死体を食って生きていた。

獺岳は蛭を一匹残らず念入りに踏み潰した。